

Sony AI「Hakken」：大規模仮説予測が拓く科学的発見の新境地

2026年9月、Sony AIは膨大な文献から未知の科学的関係を予測するシステム「Hakken」を発表。老化関連遺伝子において150万件以上の仮説を生成し、うち2件の新規相互作用（TP53-BAMBI、RAF1-TNF）を実験で確認した、日本発の重要なAI for Science事例である。

技術的成果とメカニズム

154万件の仮説生成と2件の新規発見

老化関連で確信度の高い仮説を大量生成し、うち2件を「文献に記載のない相互作用」として実証。

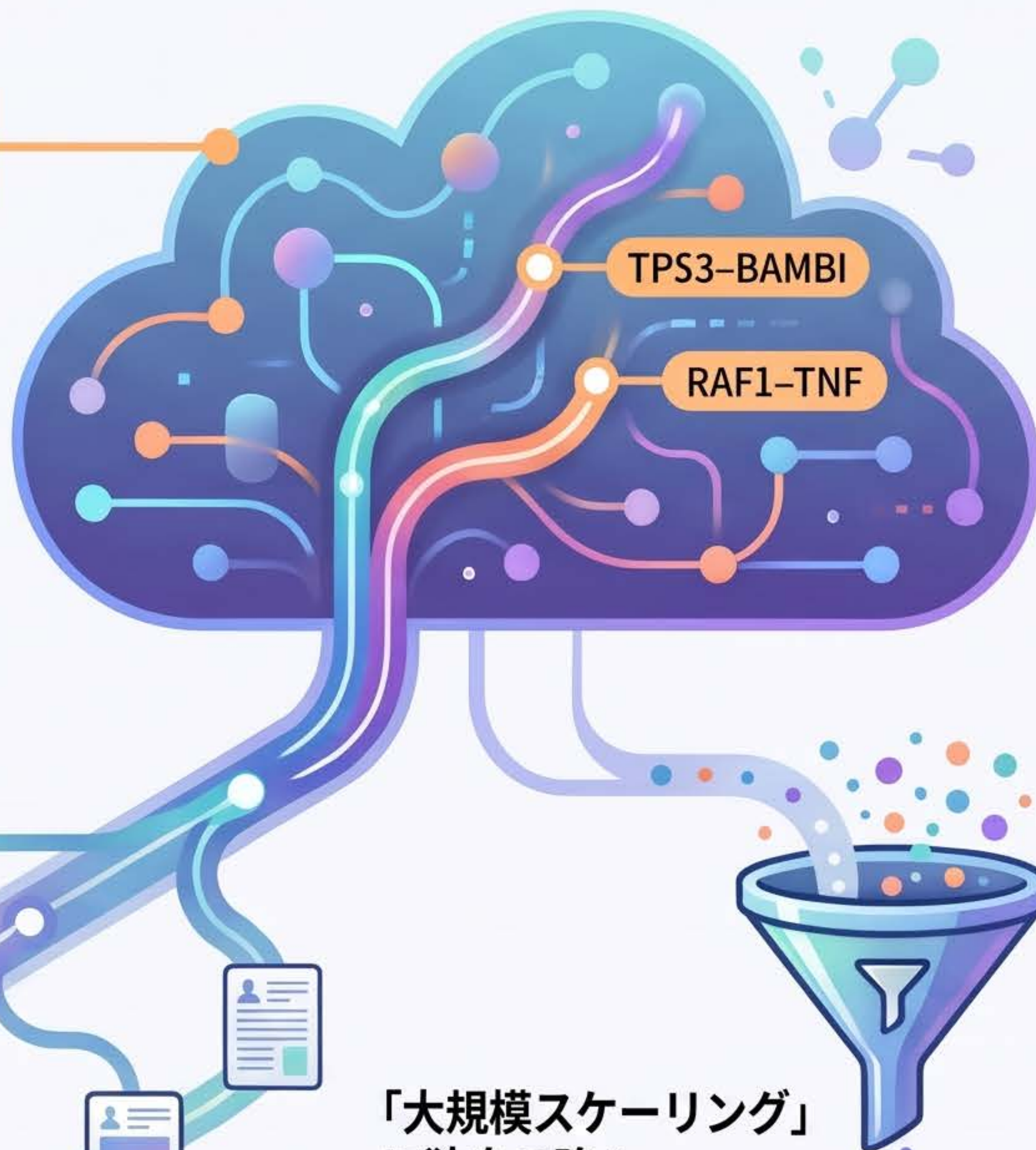
予測（THiGERLLM）と説明（PHELinE）の統合

THiGERLLM
(予測)

PHELinE
(説明)



根拠となる
文献経路



「大規模スケーリング」に独自の強み

実験の自動化よりも、膨大な科学データからの「有望な仮説の絞り込み」に特化。

戦略的意義と知財の課題

他社AI（Google/FutureHouse）との差別化



Hakken
(Sony AI)

150万件超の
仮説スコアリング
+
文献ペースの説明



AI co-scientist
(Google)

マルチエージェント
による実験計画
+
討論・進化



Robin
(FutureHouse)

疾患標的の提案
+
人間とAIによる
検証ループ

実験計画まで自律化する他社に対し、Hakkenは検証可能性と網羅性を重視した設計。



特許適格性には
「人間の実質的寄与」が必須
AIが見つけた自然現象そのものは
特許化できず、具体的な治療法への
応用と人間の着想が鍵。



オープンソース公開による
エコシステム構築

「HakkenOSS」としてGitHub
で公開。特許独占よりも学術的・
公共的貢献を優先する戦略。